日本語指導Q＆A

【質問項目】

１　外国人児童生徒の受入れが決まったら、どんな準備や心構えが必要？

２　通訳をしてくれる人や、学習・生活の支援をしてくれる人は、どうやって探す？

３　日本語指導が必要かどうかはどうやって判断する？

４　日本語能力測定法にはどんなものがある？実施には専門的な知識や経験が必要？

５　どんな教材を使っている？

６　日本語があまりわからない保護者への連絡・伝達はどうしたらいい？

７　日本語の学習状況がまだ十分でない生徒は、高校入試で特別な措置は受けられる？

８　日常会話は問題ないように見えるが、学習内容が理解できていない。どうして？

９　日本語学習に意欲が持てない児童生徒、どうすればいい？

【回答】

**１　外国人児童生徒の受入れが決まったら、どんな準備や心構えが必要？**

外国人児童生徒の受入れは、学校や学年、学級における多文化共生の文化の醸成を推進していく好機です。

受入れに際しては、まず、当該児童生徒と保護者の不安を和らげられるよう、管理職と連携しながら、温かな雰囲気の中で受入れ時面接を行います。そのためには、学校から伝えること、学校が聞いておくことを整理し、必要に応じて、通訳を手配したり、学校生活紹介ビデオなど視覚的に情報を伝達できる資料や、記入していただく書類を準備したりするなど、事前の準備が大切です。

文部科学省が作成している[「外国人児童生徒受入れの手引」](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002/1304668.htm)は、外国人児童生徒等教育に関わる様々な人が、それぞれの立場で具体的にどのような視点を持ち、どのような取組を行うことが必要かをわかりやすく解説しています。ぜひ参考にしてみてください。

**２　通訳をしてくれる人や、学習・生活の支援をしてくれる人は、どうやって探す？**

　　愛媛県では、各市町教育委員会が、必要に応じて、学習・生活支援のための補助員（支援員）

を配置しています。所属する市町教育委員会に、まず相談してみましょう。各地域の国際交流協

会・国際交流センターや、日本語学習支援団体の協力が得られることもあります。

**３　日本語指導が必要かどうかはどうやって判断する？**

　　日本語指導の必要の有無に関する判断は、校長の責任の下で行います。日本語指導担当教員、

在籍学級担任、教科担当教員、日本語指導補助者など、複数人によって、児童生徒の実態を多面

的な観点から把握、測定した結果を参考としましょう。多面的な観点とは、日本語の能力、学校

生活への適応状況も含めた生活・学習の状況、学習への姿勢・態度、児童生徒や保護者の願いな

どが挙げられます。日本語の能力については、DLA（Dialogic Language Assessment）など

の日本語能力測定法も積極的に活用し、客観的に把握できるようにしましょう。

**４　日本語能力測定法にはどんなものがある？実施には専門的な知識や経験が必要？**

　　日本語能力測定法には、東京外国語大学が開発したDLAや、早稲田大学川上郁夫研究室が開

発したJSLバンドスケールなどがあります。

DLAは、マンツーマンによる対話を通して測る支援付き評価ツールです。日常会話はでき

るが、教科学習に困難を感じている児童生徒を対象にしています。学習支援のための指導計画や学習活動及び教材の選択について考える際のヒントが得られます。

JSLバンドスケールは、日本語を第2言語（Japanese as a Second Language: JSL）として学ぶ子どもたちの日本語能力を把握するために開発された「測定基準」で、子どもの日本語の発達段階を把握し、「ことばの力」を育むためどのような実践を行うかを考えるためのツールです。

どちらも、初めての人にも実施できるよう、使い方が丁寧に解説されています。

**５　どんな教材を使っている？**

日本語指導の教材は一律に決められているわけではありませんので、児童生徒の実態に合わせ

て、各学校で既存の教材を使用したり、自作したりして対応しています。

文部科学省が管理・運営する「かすたねっと」では、日本語指導の実績豊かな地域で作成され

た「外国人児童生徒等教育のための教材」を検索することができます。児童生徒の実態と照らし

合わせて活用してみましょう。

**６　 日本語があまりわからない保護者への連絡・伝達はどうしたらいい？**

　　 「やさしい日本語」を使うように心がけるとともに、行事や準備物のお知らせなどは、絵や写真を用いることで理解しやすくなることがあります。また、上記５で紹介した文部科学省「かすたねっと」では、保護者へのお知らせに利用できる多言語対応の文書資料も検索可能です。

無料の翻訳アプリケーションを活用することも有効です。国立研究開発法人情報通信研究機構（NICT）が開発しているVoiceTraは、音声で入力した内容が文字化され、その内容を翻訳したものが文字で表示され、音声で再生することができます。翻訳アプリケーションを使う場合も、「やさしい日本語」に言い換えて入力することで、誤変換が少なくなる場合があります。

**７　日本語の習得状況がまだ十分でない生徒は、高校入試で特別な措置は受けられる？**

　　「令和６年度愛媛県県立高等学校入学者選抜実施要項」では、「帰国または入国５年以内」か

つ「外国における在住期間が継続して１年以上」の海外帰国生徒等に対し、「海外帰国生徒等取

扱措置願」の提出があった場合、「学力検査の実施等に講ずべき措置について協議する」と示さ

れています。

**８　日常会話は問題ないように見えるが、学習内容が理解できていない。どうして？**

　　一般的に、生活場面で使う言語能力の獲得には2～3年、学習場面で使う言語能力の獲得には5～7年かかると言われています。学習言語能力は学習の場で主に獲得されるものであり、子どもが生活の中で自然と身に付けられるものではありません。そのため、日常会話はできても、学習内容が理解できないという状況が起こり得ます。「学習内容が理解できない」ことが、日本語能力の問題なのかその他の問題なのか、見極めていく必要があります。

**９　日本語学習に意欲が持てない児童生徒、どうすればいい？**

　　保護者に伴って来日した児童生徒の場合、日本語学習に目的意識を持てず、学習に用いる表現

や文法規則に必要性が感じられないこともあります。そのような場合は、無理に同じ学習項目に

留めて学習を強いることなく、新しい内容と関連付けて指導したり、児童生徒の興味関心の高い

内容などを取り挙げたりしてみることも手立ての一つとなります。また、国際交流基金などの

様々な機関・団体が、クイズやゲーム形式で日本語を学ぶことができるアプリなどを作成・公開

していますので、活用してみましょう。

　　キャリア教育の視点から、児童生徒が将来への見通しを持てるよう、支援していくことも手立

ての一つとなります。

≪参考資料≫

文部科学省　『外国人児童生徒受入れの手引　改訂版』（2019年３月）